日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.29(2), Aug, 2025

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 夏期合宿研究会情報
- ♪ 定例研究会
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号について

巻頭言

「木を見て森を見ず」

小川 宏（福島大学）

毎年、夏の暑さが記録を更新し続けている。これまで多くの識者や科学者が地球温暖化、いや「地球沸騰化」への警鐘を鳴らしてきたが、いよいよ一般市民レベルでも「地球が壊れかけているのかもしれない」と未来に不安を感じる人が増えている。ただし、不安はあっても、その危機が明日や来年に一気に襲ってくるわけではなく、毎年じわじわと迫ってくるため、「今すぐ行動しなければ」と真剣に考える人は多くない。かくいう私も、毎日自家用車で CO₂を排出しながら出勤し、研究室ではすぐにエアコンをつけて「今日も暑いな！」とぼやいている有様である。まさに、ゆでガエル理論のカエル状態だ。

さて先日、リビングで妻がテレビの将棋中継を観ながら「4五銀！4五銀！」と応援している光景を目にした。藤井聡太棋士のファンである妻は、将棋の駒の動かし方を知っている程度だが、テレビ画面には AI が示す最善手が表示されている。そのため、視聴者は誰でも“正解”を知っており、実際の対局者だけがそれを知らないという、少し奇妙な構図になっている。もし棋士が AI の最善手を選ばなければ勝率メーターが急落し、「あー、やっちゃったな」と素人でも残念がる。この状況を想像すると、当の棋士たちの心境はいかばかりかと少し気の毒になる。対局後の感想戦も、いずれは「AI と照らし合わせてみましょう」という流れになるかもしれない。そうなると、「いっそ AI 同士の対局を見たほうがハイレベルなのでは」と思ってしまうようだ。だが、もし本当にそうなれば、人間には理解できない対局となり、将棋の面白さそのものが AI に奪われてしまうかもしれない。

スポーツの世界でもテクノロジーの導入が進んでいる。プロの現場では、過去と現在の膨大なデータをもとに iPad で戦術を確認しながら試合を進める姿が一般的になった。気がつけば、トップレベルのバレーボールではラインズマンが消え、イン・アウトの判定は審判補助システム「ホークアイ」が担っている。機械の判定が正確で、人間の審判はそれに劣るという認識が広がりつつある。実際、少年スポーツでも子どもが審判の微妙な判定に対して、指で四角を描いて「チャレンジ！」と冗談を言う光景が見られるようになった。こうした風潮の中で、審判という役割に対する権威や魅力が薄れ、将来的には審判を目指す人材が減り、テクノロジー依存がさらに進むことが予想される。スポーツが「テクノロジー前提」で行われるようになり、いわばリアルスポーツのテレビゲーム化が進んでいると言っても過言ではない。

本会報の読者が専門とする体育哲学・スポーツ哲学という分野は「体育とは何か」「スポーツはいかにあるべきか」といった、どちらかと言えばマクロな視点で物事を考える学問である。言わ

ば、「森を見る」ための学問だ。もちろん、運動生理学によるミトコンドリア研究、バイオメカニクスによる投球時の肩関節の角速度分析は重要で価値がある。しかし、誰もが「木」ばかりを見ているのは、森の全体像や変化に気づけない。私たち哲学研究者は、体育やスポーツの本質を見つめ、広い視野で現状を捉え、望ましい方向へと導いていく役割を担っているのではないだろうか。

自動車やエアコン、AIの最善手、スポーツでのテクノロジー——どれも便利で、つい手を伸ばしてしまう。しかしその先にどんな未来が待っているのかを見据えなければ、気づけば世界中が「ゆでガエル」だらけになっているかもしれない。テクノロジーは生活を便利にしながら、私たちの暮らしに深く根を下ろしてきた。一方で、スポーツは本来、生身の人間同士の全人的な競い合いであり、「遊び」でもあった。審判もまた人間が担う、人間らしい文化だった。この特徴をどう維持し、どう発展させ、どう未来へとつなげていくのか——今こそ、広い視野で、森を見る目をもって見つめ直す必要がある。

※この文章は ChatGPT による校正支援を経て書き上げられました (笑)。

小川 宏 (ogawa@educ.fukushima-u.ac.jp)

体育哲学考

失われた *Ars Gymnastica* を求めて

根本 想 (育英大学)

16世紀イタリアの医師・人文主義者メルクリアリスの主著 *De Arte Gymnastica* (*DAG*) における *ars gymnastica* の構想は、現代のスポーツ科学や体育実践とは異なる知の構造を持つ。この構想を紐解けば、身体と知の関係を再考する上で重要な示唆が得られる。私たちはしばしば *DAG* の書名を『体育術』や『体操術』と訳し、その主題を現代のスポーツ科学や体育学の枠組みの中で理解しようとする傾向がある。しかし、彼が構想した *ars gymnastica* は、そうした近代的な知の枠組みに収まらない独自の奥行きを備えている。

DAG 第1巻第3章で *gymnastica* を定義する際の手法は、彼が人文主義者であることを如実に示している。すなわち、ギリシア語原典を引用し、続けて自らのラテン語訳を添えるという、人文主義者に典型的な学問的所作である。このような構成は *DAG* 全編に通底しており、第1巻第3章では、古代ローマの医聖ガレノスの定義が掲げられ、それに自らのラテン語訳が続けられている。

ἡ τέχνη γυμναστική ἐστὶν ἐπιστήμη τῆς ἐν πᾶσι γυμνασίοις δυνάμεως,

hoc est, gymnastica est quae omnium exercitationum facultates novit, aut potius, gymnastica ars est scientia potentiae omnium exercitationum

(すなわち (*hoc est*)、*gymnastica* とは、あらゆる運動の効能を知るものである。いや、より正確には (*aut potius*)、*gymnastica* の術 (*ars*) とは、あらゆる運動の力にかかわる知 (*scientia*) である)

この訳文の構成は示唆的である。彼は *DAG* の他の箇所と同様、まずギリシア語原典を引用し、*hoc est* (すなわち) と典型的に訳し始める。しかし今回はその直後に、他の翻訳箇所には見られない訂正句 *aut potius* (いや、より正確には) を挿入している。これは単なる言い換えではなく、当時の通俗的な理解に対する距離を明確に示す語の選択であり、そこに彼の思想的な姿勢があらわれている。通俗的理解をあえて前段に置き、*aut potius* によって訂正するという構成には、意味の差異を際立たせる意図的なレトリックが読み取れる。そしてこの *aut potius* によって彼は、ガレノスの定義に潜んでいた理念的な構造——*τέχνη* と *ἐπιστήμη* の結合——を、ラテン語の *ars* と *scientia* の連関として再定式化したのである。

この *ars* と *scientia* の結びつきこそ、メルクリアリスによる *ars gymnastica* の構想を理解する鍵

となる。*ars* は、単なる身体技能や職人的技巧を指す語ではなく、ギリシア語の *τέχνη* に対応する、理に則った実践知を意味していた。一方、*scientia* は現代の科学 (*science*) とは異なり、自然科学から人文学に及ぶ広大な知の領域を表す語であった。その語源 *scire* (切り分けて識別すること) が示すように、*scientia* は、単なる数量的分析ではなく、物事の秩序や理を見極め実践へと結びつける判断力や洞察を含む、より包括的な「知」を意味していた。

したがって、ガレノスが *γυμναστική* を単なる *τέχνη* ではなく *ἐπιστήμη* と結びつけ、メルクリアリスがそれを *ars* と *scientia* の統一として再生させたことは、身体実践を知的営為と不可分なものとして捉える思想の表出である。こうして再構成された *ars gymnastica* は現代のスポーツ科学の源流とみなすべきものではなく、知と実践が分離される以前の「統一された知の体系」として理解されるべきであろう。

このことは *DAG* が扱う内容にも表れる。たとえばメルクリアリスは第3巻で呼吸 (*spiritus*) や発声 (*vociferatio*) といった身体操作を *ars gymnastica* の重要な要素の一つとして位置づけている。ここに、現代の「体育」や「体操」という訳語から連想されるスポーツや身体運動の範疇を越える *ars gymnastica* の広がりが示唆されている。

メルクリアリスが古典から丹念に甦らせた *ars gymnastica* を、安易に「体育術」という現代の言葉に回収しようとすることは、その構想に内在していた豊かさを矮小化するに等しい。*aut potius* に込められた、*gymnastica* において *ars* と *scientia* を統合しようとする壮大な試みは、彼の死によってある意味では未完に終わった。いや、むしろその続きを、彼は数世紀を隔てた未来に生きる私たちへ託したのではないか。ルネサンス期の人文主義者さながらに彼の言葉の海に身を浸すとき、忘れられていた知の芳香がふいに立ちのぼる。深い時間の層に沈んでいた *ars gymnastica* のかすかな輪郭が、静かに私たちの内に浮かび上がってくるのである。

根本 想 (nemoto@ikuei-g.ac.jp)

書籍紹介

山口周 (2023) 『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？
-経営における「アート」と「サイエンス」-』 光文社新書

浦谷 郁子 (中央大学)

「世界のエリートはオシャレなのか？いや、そうだろうか？」と、本のタイトルを見た時、気になる単語から連想される言葉を漠然と思い浮かべた。何かを学びたい一心というよりも本のタイトルに惹かれて手にした。購入した本の目次を見て気づいたのが、混じり合うのかわからない単語が、タイトル、サブタイトル、目次に書かれてあったことである。正直、理解できるのだろうか、読むのを諦めないか、心配になった。しかし、ビジネスの世界を知らない私でもわかる言葉、感情の比喻を織り交ぜながら書かれてあることで、時にクスッと笑い、共感し、疑問を持ち、さまざまな考えを呼び起こすことになった。本書を通じて呼び起こされたさまざまな考えとは何か整理したい。

世界のエリートは、ビジネスにおいて美意識、哲学を持っていることが必要であると示されていた。私が漠然と思い浮かべた「世界のエリートはオシャレなのか？」は、見当違いであったと恥ずかしさを感じた。しかし、恥ずかしいほど見当違いであると思っていた直感が、決して恥ずかしいことではないと読み取れる文面もあった。例えば、高度な意思決定の能力は、直感的・感性的なものであり、絵画や音楽を「美しいと感じる」と同じように、私たちは意思決定している。直感的・感性的な側面は、数値やデータに比べて決定的な説得力はない主観的なものになるが、さまざまな場面における最終決定は、直感・感性による主観的見解に委ねられているのであろう。言い換えると、情緒や感性を育くむのは「美意識」になる。

本書において一貫して伝えていることは、「真善美」を持ち合わせることの重要性である。ここでの「真善美」とは、真が論理 (直感)、善が法律 (倫理、道徳)、美が市場調査 (審美感性という主観的な内部のモノサシ) になる。「ビジネス」と「真善美」だけを考えると結びつくようには

思えないが、読み進めると市場主義が求められる現代社会であるからこそ「感じる」ことの大切さを示していた。「美意識」は、日常生活の中で何気なく感じている。美的感覚がさまざまな場面で意思決定につながっているのかもしれない。そして、本書では、この「美」と「芸術」が等しい関係であると示されている。これは、本書のタイトルとサブタイトルにも現れている。では、経営における「芸術・アート」とはなんだろうか。

経営は「アート」「サイエンス」「クラフト」が混ざり合ったものになるが、必ず勝つのが「サイエンス」と「クラフト」になる。例えば、アート VS サイエンス、アート VS クラフトの場合、どちらもアートよりもサイエンスとクラフトの方が客観的に主張することができる。サイエンスはさまざまな情報を分析した結果から、クラフトは過去の失敗経験を踏まえた結果から意思決定を客観的に示せるが、アートは後から説明するのが難しく、意思決定が難しいものになる。しかし、客観的に示せるものがビジネスにおいて勝利とは限らない。経営では、これら3つの関係が結びつき、補い合える関係になることが成功になり得る。経営の成功構図としては、トップに「アート」を据え、左右の両翼を「サイエンス」と「クラフト」で固め、パワーバランスを均衡させることが必要であると主張されていた。主観的である「アート」がトップである考えは、率直に面白さと難しさがあると感じた。もし、この構図がスポーツで起こった場合どうなるのだろうかと考えを巡らせた。

人は心のどこかに美意識を育んでいるはずだが、主観的に捉えられる美は、明確な物差しがないため、後回しにされることもある。美意識が後回しになることは、人が持つ根底よりも、数値や記録など目に見える客観性に重きが置かれるのだろう。根底にある「美しさ」を問うことが、どの分野においても最終的に必要になるのだろう。そして、この「美しさ」と「芸術」の関係がどうであるかは興味深いことである。分野によって「美」と「芸術」の関係が等しいとは限らないにしても、何らかの関係があるのかもしれないと考えさせられた。

浦谷 郁子 (uratani@tamacc.chuo-u.ac.jp)

私の研究

「地球の子」の視点

跡見 順子 (帝京大学先端総合研究機構)

私は、自分が「地球の子」であることを、誰よりも強く自覚している。それは、地球環境で創発したいのちの最小単位である細胞を通して日常を見つめ、自分の身心につなげて科学しているからである。進化の過程で残されたシステムはとてつもない試行錯誤や生き残れなかった無数の生命達の遺伝子変異を乗り越えての存在であることを考えると、モノゴトの思考の原点をそこにおくのが妥当であるとの確信がうまれるのである。あまりに意外で、あまりに確信的でかつ革新的であるので、この視点をこれから「人間を生きる」すべての人々に伝えたい・残したいと思うようになった。それは身心で確信を得たからである。モノも頭も使いようである。「使いよう」を支えるのが、この30年間謎解きゲームのように追いかけてきた α B-クリスタリンというタンパク質である。遺伝子の変異ではなく、人が行う抗重力動作で α B-クリスタリンのタンパク質を増やすことで、立位を支えるヒラメ筋が腓腹筋と同等に大きくなった(マウスやラットでは1/10)。脳でも活躍していることがわかってきた。

「研究者になる」という将来像はまったくなかった。更にお茶の水女子大文教育学部教育学科体育学専攻には、第二志望で入ってしまったので行き当たりばったりの人生である。そこで「人間の生物学」(ショシャール)を紹介された。この本も、「細胞の分子生物学」も、ともに行間に生命体としての「人間」賛歌・「生命」賛歌が溢れる。実際、忌み嫌っていた動物実験や、恐る恐る始めた細胞を相手に実験をするようになると、技術革新が目覚ましい顕微鏡を用いた可視化により得られた画像の内部の精巧さ・緻密さに圧倒される。幼い頃から疑問だったが、性悪説ではなく性善説が正しいとの確信に至る。しかし、実際の社会はどうか。世直しの起点を探さざるを得

ない。研究者になった今、研究者は「正解」であったとつくづく思う。なぜなら、小さい頃から何でも面白いが、それでもいつもその面白い自分をみている目があったからだ。現在でも面白い研究の成果をきくとかならず、「それで？」というその先の話や、あるいは「その現象を生み出した原因は何だろうか？」と問う気持ちがすぐに生まれてきて、素直に喜べない自分を発見する。定年後 18 年経つ今でも「卵殻膜の細胞健康効果」研究寄付講座が続いているのは、「元から考える」「事例はサイエンス」(になる)の二箇条で会社経営をしてきたファウンダーの長谷部由紀夫氏と原点を共有するからである。運動の研究とともにこの凄さを知ってもらいたいと心から思う。

夢想はするが、確信がもてる背景がほしい。思考が哲学的になるきらいがある。しかし従来の人間の経験やアタマで考えたすえうまれた哲学だけで答えを出すのは直感的に危険であると感じていた。ゆえ、哲学的、あるいは宗教的なところは必要だと思うが、「信じる」という行為は受け付けられない自分がいつもいた。

「青空をもとめてアメリカにゆく。太平洋の真ん中で日本の湿ったところが解放されアメリカのここらに変わってゆく自分を発見する」。2007 年の定年記念誌「この空をとべたら」の冒頭のことばである。大好きな青空とたしかなのは、踏みしめる大地、この地球に生きていること。この地球で創発した生命の末裔として生きていること。事実はうけいれるしかない。女性に生まれたことも否定してもしょうがないこと。運動の分野で活躍する女性は少ない。それをなんとかしたいと思う。全ての事実をいかに肯定的に受け入れたらよいか、そのシナリオをサイエンスの俎上に載せて答えを出し、実装したい。否応の話ではなく、事実をうけいれ、生産的な方向性を生み出そうとするのは、「体育学」の「健康科学」「トレーニング科学」を専門的に研究してきた成果だとおもう。方策をださずに問題だけをあげつらうのは好きではない。生命体・細胞にとっても、私たち人間にとっても重力が拘束条件である。拘束条件ではあるものの、それを感じさせない動きが、臥位身心調律運動で可能になったのだからすごい。そのモデルが α B-クリスタリンがサポートするタンパク質線維の微小管の細胞内における存在様式である。

仰臥位で行う身心調律運動を毎朝実践し、自らの身体とハラに力をこめて向き合うとき、細胞から人間全体を俯瞰する「地球の子」としての視点を核に据える身心一体科学は、私の中で鈴木大拙の唱えた「日本的靈性」と響き合う。

「地球の子」の視点が、自らの意志で地に立つことで細胞が生み出すストレスタンパク質・ α B-クリスタリンの発見から健康科学の新しい理論と教育実践を著した学術書「身心一体科学 考え方と方法 ―細胞・体軸・エネルギー代謝を意識でつなぐ α B-クリスタリン適応理論」(東京大学出版会)(2023 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費「学術図書」(課題番号 23HP5176))が 2024 年 3 月 11 日に発刊され、このたび日本体育・スポーツ・健康学会、「2025 学会賞」を受賞することとなりました。推薦いただいた関係者の皆様に感謝いたします。

跡見 順子 (atomi.yoriko.xr@teikyo-u.ac.jp)

夏期合宿研究会情報

2025 年度夏期合宿研究会 (第 2 報)

高尾 尚平 (日本福祉大学)

こんにちは。日本福祉大学の高尾尚平です。第 1 報にて周知させていただきましたとおり、今年度の夏期合宿研究会は名古屋で開催いたします。会期は 2025 年 9 月 13 日(土)・14 日(日)であり、開催場所は名古屋駅からアクセスのよい名古屋クラウンホテルです。箱根で合宿研究会が開催されていた頃と同様に、名古屋クラウンホテルでも温泉をお楽しみいただけます。他方、相部屋が前提であった箱根での合宿とは異なり、名古屋クラウンホテルでのご宿泊は 1 人部屋でのご案内となります(2 名様一室のご案内も可です)。参加方法につきましては、研究会+情報交換会+宿泊というフルコースのみならず、日中の研究会のみ、研究会+情報交換会のみ、研究会+宿泊

のみ、情報交換会のみ、といったオプションも設けております。合宿研究会をフルコースで楽しみたい方のみならず、相部屋ゆえに合宿研究会へのご参加を躊躇されていた方、研究会のみ参加してみたい方、情報交換会にはお顔を出していただける方、といった方々のご参加もお待ちしております。特別企画の企画案も引き続き募集しております。発表・参加の〆切は8月26日（火）となりますので、奮ってご応募ください。

日程：2025年9月13日（土）、14日（日）

場所：都心の天然温泉 名古屋クラウンホテル

部屋：シングルユース

（住所）〒460-0008 名古屋市中区栄一丁目8番33号 （電話）052-203-1641

地下鉄伏見駅から徒歩5分、名古屋駅より徒歩20分

☆日程表（申込みの状況によって、多少変更になることがあります）

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
13日（土）						受付	研究会①	研究会②						夕食/情報交換会
14日（日）		朝食	研究会③		昼食（各自）		研究会④	事務協議						解散

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見は、末尾のアドレスまでご連絡ください。

☆費用：宿泊費；11,500円（1泊朝食付）

研究会参加費；一般5,000円、学生・大学院生・研究生3,000円

情報交換会費；8,500円

☆申込〆切：8月26日（火） ※下記のURLよりお申込みください。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfstAkbILz8dEHtDY0ZfcT10KGGTNhRo4EsvEdYTT5X0iC7cg/viewform?usp=sharing>

※参加予定に変更が生じた場合は、すみやかに担当者までご連絡ください。

※9月5日（金）以降のキャンセルにつきましては不泊料金が必要となります。

※不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡ください。

☆プログラムの詳細は、9月上旬に配信する予定です。

【問い合わせ先：夏期合宿研究会担当】

〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田

日本福祉大学スポーツ科学部

Tel: 070-1473-2159（研究室）

高尾 尚平 (takao-s@n-fukushi.ac.jp)

定例研究会

2025年度 第2回定例研究会（案内）

坂本 拓弥（筑波大学）・野上 玲子（江戸川大学）

2025年度の「第2回定例研究会」は、下記の要領で開催予定です。詳細につきましては、決まり次第HPに掲載し、併せてメーリングリストで配信いたします。

日時：2025年11月下旬～12月上旬のいずれかの土曜日

会場：未定

発表申し込み〆切：10月中旬頃の予定

【問い合わせ先：研究担当】

坂本 拓弥 (sakamoto.takuya.ga@u.tsukuba.ac.jp)

野上 玲子 (rnogami@edogawa-u.ac.jp)

事務局より

竹村 瑞穂(東洋大学)

○「日本体育・スポーツ・健康学会 第75回大会」について

本年度の日本体育・スポーツ・健康学会大会についての情報は、大会WEB (<https://pub.confit.atlas.jp/ja/event/jspehss75>) にて閲覧することができます。本専門領域に関するプログラムも、この学会大会HPに公開されています。現時点で公開されている日程は次の通りです。詳細はWEBページよりご確認ください。

- ・大会1日目 8月27日(水) 会場：日本体育大学
 - 浅田学術奨励賞・記念講演 10時45分～11時45分 会場：3202教室
 - テーマ スポーツ欲望論の可能性 スポーツにおける人間理解の1つの方法
 - 演者 坂本拓弥(筑波大学)
- ・大会3日目 8月29日(金) 会場：日本体育大学
 - 総会 11時20分～12時25分 会場：3206教室
 - 口頭発表① 9時～9時58分 会場：3206教室
 - 口頭発表② 10時10分～11時8分 会場：3206教室
 - 口頭発表③ 13時～13時58分 会場：3206教室
 - 口頭発表④ 14時10分～15時8分 会場：3206教室
 - 口頭発表⑤ 15時20分～16時18分 会場：3206教室

○住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ健康学会事務局 (<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>) にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会に登録されたメールアドレスを専門領域メーリングリストに登録させていただいております。諸連絡や会報のご案内は、メーリングリストまたは体育哲学専門領域WEBページを通じてのみ行い、郵送は致しませんのでご了解ください。メーリングリストへの登録を解除される方は事務局までご連絡下さい。

次号について

佐々木 究(京都産業大学)

目下、会報の発行回数・内容についての見直しが検討されており、次号の発行時期は未定です(発行は続きます)。

研究に関する情報をお持ちの方は広報担当：佐々木 (sasaki9@cc.kyoto-su.ac.jp) までお寄せください。

体育哲学専門領域会報第 29 巻第 2 号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域
深澤浩洋（代表）
編集者 佐々木究, 阿部悟郎, 石垣健二 (広報担当)
発行日 令和 7 年 8 月 7 日
連絡先 〒115-8650
東京都北区赤羽一丁目 7-11
東洋大学赤羽台キャンパス
HELSP0 HUB-3 竹村瑞穂 気付
bureau@pdpe.jp

【編集後記】

昨夏は観測史上もっとも暑い夏だったと聞きました。そして今年、西日本ではあつという間に梅雨が明けましたし、もしかするとさらに暑い夏になるかもしれない。北海道で最高気温が 40℃に迫るほどになるなんて今まで考えもしませんでした。炎天下での活動は命に関わります。くれぐれもご自愛ください。

さて、会員の皆さまのご好意に支えられている本会報ですが、このたびその発行体制が改められることとなります。正式には夏の総会で決定されますが、誌面のさらなる充実に向けて一層のご支援をよろしくお願ひします。さしあたり記事執筆の依頼がありましたら、何はともあれ「Yes」のご返事をくださいますよう。(S)